

あんげろす

『キリスト教学校教育同盟百年史』の編纂を了えて

学長 大西 晴樹

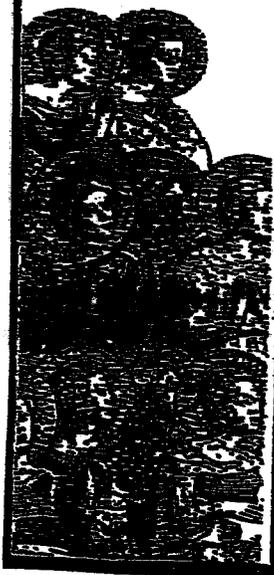
2010年に創立百周年を迎えたキリスト教学校教育同盟の百年史がこの3月末に教文館より刊行される。通史編504頁、資料編467頁、年表編（既刊）127頁の大部な3巻本である。私は編纂委員として、2001年の第1回編纂委員会から招集され、ここ数年は編纂委員長を引き受ける羽目となった。

さて、現在『明治学院百五十年史』の編纂が進行しているが、『教育同盟百年史』は、通常の学校史のジャンルを超え、聖公会から無教会までを背景とするプロテスタントのエキューメニカルな学校間組織の歴史であり、キリスト教教育研究史上独自の地位を占めることになると思う。

最古参の加盟法人である明治学院は、27代の歴代理事長のうち、初代の井深梶之助から、田川大吉郎、矢野貫城、村田四郎、久世了と5名の理事長を輩出し、海外宣教団体の援助のもとで戦前の時期の活躍が目立つ。キリスト教学校としての古豪復活はこれからである。

第57号

2012年3月



アンネ・フランク・ハウスにて
—コルベ神父に思いを寄せて—

下田好行

オランダの冬は寒い。凍てつく寒さの中、どんよりと曇った空の下で生きる。ひたすらお日さまの日差しとぬくもりを待ちわびる。オランダの人たちの忍耐強さを感じた。私は調査研究でオランダを訪れていた。調査研究の合間、ふらっとアンネ・フランクの軌跡を感じたいと思った。それは運河のほとりに立っていた。アンネ・フランク・ハウスと名付けられたそのビルは、アンネが隠れて住んでいた部屋が今もそのまま残されている。本棚の向こうにはもう一つの世界が広がっていた。隠れ部屋である。アンネたちはこの部屋で息を潜むように暮らしていたのだ。昼間は眠り、夜活動を開始する。それも明かりはなしで。そこに隠れて住んでいることを気づかれぬように。発見されたらアウシュビッツに連れて行かれるのだ。

私は福島県の白河市にあるアウシュビッツ平和記念館に行ったことがある。そこには強制収容所アウシュビッツ・ビルケナウの遺品、記録画・記録写真が展示されていた。ガス室で折り重なる死体、死体を焼く焼却炉、死体からもぎ取った金歯、眼鏡の山、死体から作る石鹸、刈り取られた毛髪、そうした戦慄の記録を見ているうちに気が滅入ってしまった。人間は人間に対してどうしてここまで残酷になれるのかと。

そうした展示の一角にコルベ神父の原画があった。マキシミアノ・コルベ神父はポーランド出身のカトリック司祭、ナチスに批判的という理由で強制収容所アウシュビッツ・ビルケナウに送られた。脱走者がでたという理由で無作為に選ばれた10人が餓死刑を受けることになった時、「私には妻子がいる」と叫び

だした人の身代りを申し出たのである。コルベ神父は餓死室で2週間の苦しみを経た後、まだ息があったので心臓に毒を注射され殺された。こうしたコルベ神父の最後の姿をペンで隠れてスケッチした人がいた。ポーランド人の画家、ミュチスワフ・コシチェルニアクである。彼もこのアウシュビッツ・ビルケナウの囚人であったのだ。

そう言えば、アンネ・フランクの場合も同じである。隠れ部屋で生活するには食事の用意をはじめ、隠れている人たちのお世話をする人が必ず必要だ。この人たちは自分にふりかかる危険を知りながら、アンネたちをかくまった。もしナチスの知るところとなれば自分の命さえ危なくなってくる。こうした勇気ある人たちが歴史の中では埋もれている。

アンネ・フランク・ハウスを訪問した夜、私はあるオランダ人であった。その人は大学で物理学を教える研究者で、祖父は時計店を営んでいた。私はアンネ・フランク・ハウスでの興奮を語った。しかし、そのオランダ人は意外と冷めていた。なんと彼の祖父もユダヤ人をかくまっていたというのだ。オランダではアンネのようにユダヤ人をかくまうことが当時日常的に行われていたそうだった。私は彼に質問した。

「オランダの人たちは偉いですね。」

「偉いのは違いますが、密告者もたくさんいた。」

「勇気ある行動ですが、そんなことをして怖くなかったですか。」

「多分、何も考えてなかったのじゃないかな。」

そう、そのような行為は考えてできるものではないのだ。コルベ神父がなぜこのような行動がとれたのか、私にはよく分からない。また、アンネの支援者やオランダの人たちがなぜこのようなことができたのかも分からない。ただ、人間にはこのような心があることも事実なのだ。

ホロコーストを作る心も人間だ。しかし、勇気を持って立ち向かったり、困っている人を助けようとしたりする心も人間なのだ。人間の中には、光と闇、愛と憎しみ、平安と恐怖、希望と失望、こうした意識が錯綜している。コルベ神父やアンネの支援者たちの意識は人を希望と平安、愛に導く。この意識が人間に力を与えるのだ。自分の中の光にだけ眼を向けて歩いていけばよいのだ。

オランダから帰る途中でそんなことを考えた。高崎線の車窓から青く澄み切った空が見えた。久しぶりに見る青さだ。やっぱり日本はいい。私は高く澄み切った青をいつまでも眺めていた。

しもだ・よしゆき(所員・心理学部教授)

キリスト教との出会いと人の縁

清澤 達夫

キリスト教との出会い

昨年11月、50年ぶりに熊本に出掛けました。熊本は、親父が国家公務員として赴任した関係で3年ちょっとの間、過ごした地です。旅の目的は、私にとってキリスト教とは何であったのか、振り返ってみたからです。

高校生活を送った九州学院の創立百周年記念「敬愛会 OB の集い」に、出席しました。「敬愛会 OB」(現在は男女共学ですが、当時は男子校)は、九州学院のなかで“宗教部”と言っていました。宗教部と言っても、礼拝堂のお掃除や聖書や「熊本バンド」等を学ぶ“場”でした。

ここで、私は一人のチャプレンに出会いました。町野洋牧師(故人)です。多感な若者特

有の悩みを、牧師は物静かに、真摯に応えてくれました。これが、キリスト教と私の最初の出会いとなりました。その後、上京して1963年に都南ルーテル教会で洗礼を受けました。何と数年後、その教会に町野チャプレンが牧師として赴任して来られました。この不思議な再会は、キリストの掌のなかに囚われた自分を、感じ始めました。

明治学院時代

明治学院では、「基督教学生会(SCA)」に入りました。その当時のSCAは、単に聖書を解釈するだけでなく、世の中の具体的な問題にどう関わっていくべきか、“苦悩の時代”を迎えようとしていました。それは当時の学生運動による影響を差引いたとしても、学生らしい“素朴で純粋な”、やむにやまれぬ気持ちから自然に醸し出されたものでした。当時刊行された「SCA論集」第2号(1965年)には、当時の学生の心の渇きや揺れる精神状況が赤裸々に、綴られております。

そんな雰囲気の中、私は1年生の時に「東南アジア学生ゼミナール」に参加しました。ゼミナールは、「農業社会より産業社会へ」を主題に、全国から集まった留学生・日本人学生11名が4泊5日にわたり香川県豊島で話し合いました。

これを企画したのは雲柱社で、賀川豊彦(故人)によって創設された財団です。私は、それまで賀川が明治学院と関係の深いことなど、知りませんでした。お会いした賀川梅子が機縁となって、40年後に私が「賀川豊彦学会」に関係するとは、思いもよらなかった。

このような学院での生活も、最終学年の時に大学全体が学園紛争に巻き込まれていき、勉強どころではなくなってしまいました。それに伴い、SCAの仲間一人ひとは「踏み絵」を強いられるような気分になり、分裂していきました。このことは、今でも我々の世代に心の

棘となり、棺桶に片足を突っ込んだ年齢になっているのに、いまだわだかまりが解けない「心の重荷」にとなっています。

社会で働く

勤め先は、青山学院神学部卒業の牧師であった郷司浩平が創立した「日本生産性本部」でした。私にとって幸いだったのは、これまでの「労資観」に拘って争うだけではなく、生産性向上によって成果を大きくしていけば、豊かな社会を実現していけるという「新たな使命感」を得たことでした。

青春の挫折感を癒すためにも一生懸命、がむしゃらに働きました。その最中に、聖学院大学からお誘いを受けました。何と、この大学の初代学長は、明治学院で紛争解決の当事者を担っていた金井信一郎先生でした。私は、金井先生に心労をおかけしたという負い目もあり、今しか恩返しする機会がないと、お受けすることにしました。

2003年4月に赴任した大学の廊下を挟んだ前の研究室が石部公男先生で、何とSCAの先輩だったのです。石部先生が事務局長をなさっておられる「賀川豊彦学会」のお手伝いをするようになったのも、キリストの示したもう道だと考えました。

見えない糸に導かれて

このようにキリストの愛の傘のなかで、人知のはかり知れない人の縁のなかで生かされていることが、不思議です。この辺で、残された人生のなかで残った宿題をしようと思いましたが。母校での研究の場を与えてくれたのは、これも家内の郷里である徳島(賀川豊彦と親交のあった黒田四郎が牧師をしていた石井)および義兄と同窓出身者である播本秀史所長(賀川豊彦学会理事)の縁があったればこそのお導きだと、日々感謝しております。

きよさわ・たつお(協力研究員)

辞書と19世紀

木村 一

この度は、キリスト教研究所の協力研究員に加えていただきまして、ありがたく存じております。どうぞよろしく願い申し上げます。

国語学(昨今は日本語学と言うことが多いのですが)を専攻しています。ひとえに日本語の調査・研究といってもさまざまであり、関心事として、辞書と19世紀といったキーワードが挙げるすることができます。

例えば、現代の私たちの生活で、紙の辞書だけではなく、電子辞書、さらにはスマートフォンの辞書アプリなど、辞書は欠かすことができないものです。また、辞書を使う場面としては、文章を書く時、本を読んで意味がはっきりしないことばに出会った時などがほとんどではないでしょうか。そのような辞書にもさまざまな種類・内容があり、歴史も古いのです。

19世紀ということに関しては、日本という視点から考える上で、江戸時代から明治時代にあたります。しかし、どうしても江戸時代と明治時代という時代区分が濃厚に過ぎてしまい、連綿とした流れが分断されてしまうように考えています。また、日本の開国と明治維新は重要なことではありますが、日本の外に目を向けた場合、特に東アジアとのかかわりを意識した際に、宣教活動、また南京条約や日米修好通商条約の影響といったことも深くかかわってきます。そこで19世紀という表現をもっぱらに用いるようにしています。

そのような中で、ヘボン博士による『和英語林集成』は主要な研究テーマです。『和英語林集成』は、辞書と19世紀という視点をもって日本語をとらえるためには、欠くことのできない第一級の資料です。

例えば、「発明」ということばを引いてみると、

ローマ字、カタカナ、漢字を用いて見出し語が記されています。さらに、品詞表示や、丁寧な語義・用例が付されています。「発明」ということばは、「新たに器具・機械・装置といったものを生み出す」という現代の意味に先行して、「賢い」や「発見」の意味が挙げられていることが分かります。「発明な者」を「賢い人」、「発明する」を「発見」と説明する用例があり、類義語として「賢い、利口」とも示されています。その他にもさまざまな特徴があり、当時の日本語を知る得ることのできる大変有効な資料だということが確認できます。その上で、文法書や会話書などの日本語研究資料を組み合わせ、立体的に把握するように努めています。

また、日本語という観点だけではなく、辞書の大きさ、使用される文字、印刷技術、装丁にもそれぞれ理由があります。このようなことから、世の中の流れ、人的・物的交流、情報の展開と言ったことも読み取ることが出来ます。逆に読み取ったものは、当時の日本語の状況というものを理解する手立てとして還元することも出来ます。結果的に双方向の進展につながります。

辞書と 19 世紀をキーワードに、アナログとデジタルを組み合わせ、キリスト教の観点と未開拓の資料を交えながら、新たな一面を切り開いていければと考えています。

きむら・はじめ(協力研究員)

現代中国のキリスト教について

徐 亦猛

2012 年の新年の幕が開け、関西ではじめて中国南京金陵協和神学院副院長王艾明先生を迎え、貴重な講演会が開催された。そ

の時、王先生は「中国プロテスタント教会の歴史と課題」という題目で中国教会の歴史と発展について熱く語られた。王先生の講演のおかげで、現代中国のキリスト教の現状について伺うことができた。

中国の文化大革命(1966 年—1976 年)が終わり、1979 年「改革開放」の経済政策を実施された以来、中国のキリスト教会は復興され、教会と信徒の数も大きく増加した。中国全土で開放された約 13000 の教会堂のうち、その 70%が新しい建てられたものである。信徒の数は約 2 千万人である。文化大革命の影響で、中国の教会では伝道者が大変不足している。その状況を改善するために、中国の教会は神学教育に力を注ぎ、1981 年以降、中国全土で 18 の神学校と聖書学校が設立され、1998 年までに 3100 名ほどの神学生が卒業した。さらに、1987 年聯合聖書公会との合併会社——南京愛徳印刷有限公司が設立された。1999 年までに 2 千 3 百万冊の聖書が印刷刊行された。中国キリスト教協会は全国 65 か所に聖書発行拠点を設置し、また 1 千万冊の新編賛美歌を出版刊行した。この新編賛美歌には 400 曲が収録されているが、その 4 分の 1 は中国信徒が創作した曲である。

主流である中国の三自教会が発展する一方、私個人として、現代の中国において「文化クリスチャン」という特殊の社会現象が存在していることについて非常に興味を持っている。これは中国大陸において、「文化クリスチャン」の中には、公にキリスト教思想文化を認めるだけではなく、キリスト教信仰も認める人々も存在する。しかし、彼らは教会の礼拝や活動に全く参加しない。もちろん、それには色々な理由があると思われる。一面において、中国の政治的環境からの影響もある。もう一面において、彼らはキリスト教や西欧についての研究から出発し、それらに一定の価値を認めるという段階を経て、さらにキリスト

教信仰を得るといふ道を通ったからである。その道は思想文化的また哲学的な神学によって完成したのである。その中で教会からの影響が全くない。その意味で文化クリスチャンは伝統的クリスチャンと明らかに区別される。文化クリスチャンが重視するのは聖書研究ではなく、神学的反省である。彼らにとって聖餐や洗礼や教会集会は単なる儀式に過ぎない、特別な意味はない。文化クリスチャンに対して、社会からの評価もかなり異なっている。中国教会からの評価によると、文化クリスチャンはキリスト教信仰に対する認識が不十分であり、彼らは神学理論を熱愛するが、神を愛するとは限らないし、さらに神は彼らの研究思考の対象であり、礼拝や祈祷の対象ではない。しかし文化クリスチャンがキリスト教神学に研究および体験を通して、中国キリスト教発展に促進したと多くの方は評価している。

21世紀において、誰も疑いなく、中国のキリスト教会は必ず発展すると確信している。しかし、宗教政策の開放と発展に伴って、中国教会は様々な問題とチャレンジに直面している。新しい教会堂を建築する資金や正規神学教育を受けた伝道者の不足をいかに解決するのか、またキリスト教信仰によって如何に社会に応答するのか、信教の自由がどのように実現されるのか、教会として、如何に本来聖書の教えを基礎として、あらゆる面において社会の諸団体・地域・行政との緊密な関係を構築し、社会に貢献するのかなどの問題である。それは21世紀において、現代の中国教会が自分の力で乗り越えなければならない課題である。

ジョ・イモン(協力研究員)

渡辺祐子

今年度最後の「あんげろす」をお届けします。本号では、来年度から学院長の重責を担われる大西先生に久しぶりに御寄稿いただいたほか、3人の新協力研究員の先生方に自己紹介を兼ねたエッセイをお寄せいただきました。本学卒業生の清澤先生には賀川研究を、木村先生には国語学を駆使したヘボン研究を、そして徐先生には中国におけるキリスト教の「土着化」研究を、それぞれ中心テーマとして手掛けていただきます。研究プロジェクトにさらに厚みと広がりを加えてくださるであろう先生方をお招きできたことを、心より感謝いたします。

下田先生のエッセイを拝読し、十数年前に暮らしたオランダの生活はもちろんのこと、『あらしのまえ』『あらしのあと』(続きもの)と『第八森の子どもたち』という、ふたつのオランダ児童文学を思い出しました。どちらも当たり前のようにユダヤ人を助け、手を差し伸べ、かくまうオランダ人一家の様子が感動的に描かれています。おそらく「何も考えなかった」のは、「当たり前すぎること」だったからではないでしょうか。

2012年が明けてすぐの仕事は、南京神学院の王艾明氏を明学にお呼びする準備でした(王氏については、徐先生もエッセイで触れておられます)。1月に来日されるという連絡をいただいたのは、昨年12月30日。だいぶ前から準備をしていたものの、中国政府が出国の許可をなかなか出さず、そのため周知も直前になってしまったようです。王先生には、各地での講演の合間に時間を作ってください、小さな研究会を開催することができました。急ごしらえの会だったにもかかわらず、思いがけず期待以上の参会者に恵まれ、

お話の内容も実に興味深く、中国の教会の状況の複雑さ、困難さを学ぶ貴重な機会となりました。

王氏が来日するわずか数日前には、現在中国錦州の獄中にある劉曉波（2010年にノーベル平和賞を受賞し時の人となりました）の弟分ともいわれる若き思想家余傑が、事実上アメリカに亡命したばかりでした。余傑は民主運動家であると同時に、いわゆる家の教会の敬虔なクリスチャンで、亡命の最大の理由は「自由な教会生活が全くできなかったこと」でした。彼は「私にはそれが最も耐え難かった」と渡米後語っています。

中国の厳しい状況を想像させるに十分な証言ですが、しかしそのことを安易な中国批判の材料に使いたくはありません。王氏のように、多くの制限の中で、ただただ主の憐れみを信じて格闘しておられるクリスチャンが、決して少なくないからです。彼らの苦悩や喜びを心からともに分かち合える真の隣人になることができればと、王氏をお招きし、そう改めて強く思わされたことでした。

早いもので初めて当研究所主任を仰せつけてから2年が経とうとしています。昨年度に引き続き今年度も、所員はじめ、客員研究員、協力研究院のみなさまにはたくさんのご協力をいただき心より感謝申し上げます。震災後「大学の使命とは何か」がますます問われる中で、キリスト教主義を研究面で唯一支える組織として、当研究所に託された使命は決して小さくありません。その使命を果たすべく、与えられている課題を見定め、それらに誠実に取り組むことができますよう、今後とも一層のご協力をお願いいたします。

わたなべ・ゆうこ(キリスト教研究所主任)

2012年1月-3月の研究所活動

(詳細は各チラシをご覧ください)

所員会議

第6回

日時:2012年1月25日(水)14:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

第7回

日時:2012年2月22日(水)14:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

所長選挙

日時:2012年2月22日(水)14:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

公開研究会

宣教師研究PJ

「中国プロテスタント教会の現状と今後の課題」—王艾明氏を囲んで—

講師:王艾明(南京金陵協和神学院副院長、神学博士)

通訳:松谷暉介(日本キリスト教団八幡鉄町教会牧師)

日時:2012年1月17日(火)17:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

「中国キリスト教史を考える視点—本色化をキーワードに—」

講師:徐亦猛(神戸基督教改革宗長老会牧師、関西学院大学神学部講師、本研究所協力研究員)

日時:2012年3月7日(水)11:00-

場所:白金校舎キリスト教研究所

キリスト教主義教育研究PJ

「キリスト教学校礼拝の現状と問題」

講師:北川一明(明治学院学院牧師、本研究所協力研究員)

日時:2012年2月29日(水)13:30-
場所:白金校舎キリスト教研究所

研究会

SCA歴史編纂PJ

第10回

日時:2012年1月12日(木)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

第11回

日時:2012年1月26日(木)10:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

第12回

日時:2012年2月9日(木)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

第13回

日時:2012年2月23日(木)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

第14回

日時:2012年3月6日(月)13:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

3月研究会及び懇親会

開催日時:2012年3月7日(水)15:10-
開催場所:白金校舎本館 1351 教室

司会:渡辺祐子(本研究所主任、本学教養教育センター准教授)

発表①「拙著『近代日本の外交と宣教師』について」

発表者:中島耕二(本学非常勤講師、本研究所協力研究員)

コメンテーター:吉馴明子(本学非常勤講師、本研究所協力研究員)

発表②「ローマ字聖書 YOHANNE NO FUKU-IN について」

発表者:鈴木 進(本研究所協力研究員)

コメンテーター:石本東生(本学非常勤講師、本研究所協力研究員)

明治学院研究担当者打ち合わせ

日時:2012年3月7日(水)14:00-
場所:白金校舎キリスト教研究所

新着図書

(2012年1月-3月)

・『オリゲネスにおける愛の理解—オリゲネスにおけるフィラントローピア理解の独自性—』(中村康英著)、新世社、2011。(著者寄贈)

・『近代日本の外交と宣教師』(中島耕二著)、吉川弘文館、2012。

・『聖書』(フランシスコ会聖書研究所訳注)、サンパウロ、2011。

・『ATD旧約聖書註解 2 出エジプト記』(木幡藤子、山我哲雄訳)、ATD・NTD聖書註解刊行会、2011。

・『改革派教会信仰告白集 I』(大崎節郎編)、株式会社一麦出版社、2011。

・『改革派教会信仰告白集 II』(大崎節郎編)、株式会社一麦出版社、2011。

・『改革派教会信仰告白集 III』(大崎節郎編)、株式会社一麦出版社、2011。

・『改革派教会信仰告白集 IV』(大崎節郎編)、株式会社一麦出版社、2012。



あんげろす ΑΓΓΕΛΟΣ

とは、「メッセンジャー」・「天使」の意。

あんげろす 第57号

2012年3月7日 発行

明治学院大学キリスト教研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL:03-5421-5210/FAX:03-5421-5214

Email:kiriken@chr.meijigakuin.ac.jp

題字：澁谷 浩